知床博物館研究報告 Bulletin of the Shiretoko Museum 35: 73–80 (2013)

道東地域における縄紋時代中–後期の平地住居跡

村本 周三

099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 54，斜里町埋蔵文化財センター（現所属：060-8588 北海道札幌市中央区北 3 条西 7 丁目，北海道教育庁文化財・博物館課）

Ground Houses from Middle to Late Jomon Period in Eastern Hokkaido

MURAMOTO Shuzo

Hokkaido Goverment Board of Education, N3W7 Chūō-ku, Sapporo, Hokkaido 060-8588 Japan. *miscanthus.phytolith@gmail.com*

はじめに

道東地域では1990年代以降，縄紋時代中期北筒II式（トコロ6類）期–後期北筒III式期を中心に平地住居跡である可能性のある資料が増加しており，縄紋時代中期集落に伴う一施設として認知されつつある．道東地域の中期集落において平地住居跡が注目されるのは，平地住居が理論上は想定されながらも実資料に乏しい遺構であることもさることながら，竪穴住居と併存する可能性が高いこと，集落中央に立地する盛土状遺構の形成と関連する可能性が高いことから，集落構造や景観を解明するための鍵となると考えられるからである．また，道央，道南地域や東北地方では類似の遺構はほとんど検出されておらず，道東地域の中–後期集落に特徴的な遺構である点も注目される．

村本（2009）では，縄紋時代中期末葉–後期前葉の平地住居跡である可能性が高い事例が，道東地域でも斜里平野–釧路平野以東に集中し，当該期の縄紋集落の特徴であることを示した．また，道南地域や北東北地域との比較を可能とするため，平地住居跡および北筒II，III式期の暦年代上の位置づけを明らかにした．本稿では，村本（2009）で課題とした平地住居の上屋構造を明らかにすると共に，道央，道南地域に分布する後期中葉以降の平地住居跡との関係について検討した．

平地住居の定義と実資料の認定

平地住居は「地面を掘りくぼめ，その上に上屋構造を持つ竪穴住居」の対義語であり，「地面を床面とする」建物と定義される（江坂2005）．しかし，利便性向上のための床面の微調整や，使用中に床面が踏み締まることによる地表面の低下が想定されることから，定義を字義通りに適用することはできない．そのため，同時期の建物跡を俯瞰し，住居型式の分類を行った上で，著しく掘り込みが浅いものも含めて，平地住居跡と認定する必要がある．

平地住居跡を認定する際には，第1に建物跡であること，第2に竪穴住居跡とは異なり明瞭な掘り込みを持たないことを証明する必要がある．竪穴住居跡であれば掘り込みによって柱穴や炉といった竪穴内に構築された諸遺構が後世の削平を免れ，建物跡であると認識できる可能性が高い．しかし，掘り込みがない，ないしは著しく浅い平地住居跡では後世の削平を受ける可能性は高く，本州の縄紋集落で見られるような明瞭で定型的な柱穴配置を持った掘立柱建物跡でもなければ，検出やその後の認定が困難である．また，仮に削平を受けていない遺構でも柱穴や炉がない遺構であれば，同様に検出，認定が困難である．

本稿で示した資料は，村本（2007）において北海道における火災住居跡を集成した際に抽出した資

料を主体としている．村本（2007）では火災住居跡の認定を木炭の出土を第一の根拠とした．本稿で示した資料も大半が木炭を伴っており，その配置等から建物跡である可能性が高いと考えた資料である．また，掘り込みの有無については周堤帯ないしは屋根の一部である褐色土帯等の分布や盛土状遺構中での検出であることを指標とした．

縄紋時代中期平地住居跡の事例

縄紋時代中期末葉–後期前葉の平地住居跡である可能性が高い事例は，道東地域でも斜里平野–釧路平野以東に集中している（村本2009, 45）．面積のわりには大規模な面調査が少ない北海道では，発掘調査密度に極端な偏りがあるため，北筒諸型式の集落跡の調査実績の多寡を示している可能性はあるが，少なくとも道央地域以西での検出事例は非常に少ない．

特に近年では斜里町内での検出事例が増加しているが，その原因は3点に集約される．

第1に，斜里町が道内でも近年稀に発掘件数が多い点．1箇所当たりの調査面積は狭いものの，斜里町が調査主体となった調査遺跡数は特にこの数年道内屈指である．調査数と遺構の検出数には一定の相関関係があるのは当然である．

第2に調査原因との関係で幅2–3 mのトレンチ状の調査が主体である点．竪穴住居跡であれば検出面を下げることにより検出が可能であるが，盛土状遺構や平地住居跡は検出可能面まで掘削した時点で底面以下まで掘削されていることもあり得る．しかし，トレンチ調査であれば土層断面での掘り込みの確認が可能である．竪穴住居跡が調査され始めた頃，1900年代前半にはトレンチ調査によって検出ノウハウが蓄積されたのと同様である．また，集落跡を横断する調査が多いため，集落の全貌を明らかにする点からは不利でも，立地を異にする多様な遺構を調査できる可能性も高くなる．

第3点は2004，2005年度に来運1遺跡で遺存状態が良好な平地住居跡を調査する機会に恵まれた点である．未知の種類の遺構に比べて，調査経験がある遺構の検出が容易であることはこれまでの発掘調査史から明らかであり，来運1遺跡での調査経験がその後の平地住居跡検出に寄与していることは間違いない．

1．斜里町オクシベツ6遺跡

平地住居跡である可能性がある遺構として2007年度調査のPIT 20，27（松田2008; 村本2009），2011年度調査の焼土群1および2，7，8，9（松田ら2012）があげられる．

PIT 20（村本2009, 48）は，盛土状遺構周辺で検出されており，周辺には石器砕片の集中や焼土跡などが見られた．周堤帯ないしは屋根土層と推定されるローム質土帯は環状に巡っており，直径は5 m程度の円形ないしは楕円形と推定される．遺構の半分程度は調査区外に残されている．木炭はローム質土帯の下や内側を中心に出土し，中心と思われる方向からの放射状や，それに直行するものが目立つが，小型の材が多いこともあり，配置がやや不規則に見える．床面は，ほぼ水平かつ平坦で，盛土状遺構を床面としていた．柱穴や炉と思われる遺構は検出されなかった．遺構内出土遺物からは時期が特定できなかったが，盛土状遺構からトコロ6類期の土器が出土しており，当該期の遺構である可能性が高い．

PIT 20周辺の盛土状遺構中には，木炭の集中やPIT 20と類似したローム質土帯が検出されており，発掘調査時には認識できなかった類似の遺構が存在した可能性がある．

PIT 27は水成堆積層中で検出された．木炭の分布から推定した底面は旧河川の落ち込みに沿ったため平坦ではなかった．木炭は5 m程度の範囲に分布し，木炭周辺の水成堆積層も焼土化していた．柱穴や炉と思われる遺構は検出されなかった．

焼土群1は，約5 mの半円形の範囲に焼土，木炭が分布するものである（松田ら2012, 14）．遺構の半分程度は調査区外に残されている．大型の木炭が少ない反面，焼土は面的に広がっていた．中心部付近で出土した焼土は特に厚く，炉跡である可能性がある．木炭は焼土周辺の他，焼土に覆われるような状態でも出土している．柱穴は検出されなかった．

焼土群2，7，8，9（松田ら2012, 13）は明瞭な掘り込みこそ見られないが，旧河川の落ち込みに焼土，木炭が分布しており，出土状況はPIT 27に類似する．それぞれはほぼ同規模で，水成堆積層を挟み同一地点で検出された．木炭出土面の上面にまで焼土化が見られるため，木炭生成時には上面を河川堆積層が覆っていた可能性が高い．PIT 27以上に旧河川の落ち込みが深く，周囲より30 cmほど深い．PIT 27および焼土群2，7，8，9については竪穴住居跡ではないものの，平地住居跡の定義からも外れる遺構である可能性がある．しかし，このような木炭，焼土の出土状況は他の遺跡でも見られる上に，木炭上面を焼土が覆うような土屋根特有の堆積を示していることもあり，建物跡として検討をすべき遺構であると考える．

2．斜里町朱円48遺跡

平地住居跡である可能性がある遺構としてPIT 5，6，7の3基検出されており，いずれも火災住居跡である（松田・村本2010）．

PIT 5とPIT 6はローム質土帯を持つが，柱穴は検出されなかった（松田・村本2010, 11–12）．PIT 5では炉跡が検出され，焼土中から魚骨と思われる骨片が検出された．PIT 7は柱穴状の浅い小穴と周溝状の溝がめぐっていた（松田・村本2010, 18）．また，地床炉と思われる焼土跡が検出されている．いずれも床面上からトコロ6類土器の完形品が出土しており，当該期の遺構と推定される．

3．斜里町来運1遺跡

2004–05年の発掘調査では，竪穴住居跡8基，平地住居跡と考えられるとされた遺構1基（PIT 20），焼けた平地住居跡1基（FH）などが報告されている（松田2005, 2006）．平地住居跡と考えられるとされたPIT 20は，検出面がX層で，縄紋時代中期の包含層（VII層）および縄紋時代早–中期の包含層（IX層）より下層であり（松田2005），仮にX層上面での検出であったとしても他の竪穴住居後に比べて掘り込みが著しく浅いとは言い難いことから，平地住居跡の可能性は低いと考えられる．

FH平地住居跡（松田（2005）ではPIT 11）は，長軸（北西–南東）約13 m，短軸約12 mの隅丸長方形ないしは楕円形の遺構である．長軸はほぼ地形の傾斜方向と一致しており，北西–東側の標高が高い部分は畑地の均平に伴い削平されていた．床面は南側が高く，最大で0.4–0.5 m程度の比高差はあるものの，全体としては平坦である．また，標高が高い南側は0.3 m程度の掘り込みがある反面，北–東側は包含層上に周堤ないし屋根土層，その流出土とされるローム質土帯が検出された（村本2009, 49）．一部に掘り込みを持つ形態であるため「準平地住居」とでも呼ぶべきかもしれない．木炭は南西–北東側で遺存状態がよく，特に南側では格子状に組まれ，竪穴の中心方向へと延びる材が，中心に近づくほど間隔が狭くなる状態が観察できる．樹皮付きで竪穴の中心方向へと延びる材でも直径は5 cm程度のものが中心であり，炭化による縮みを考慮しても直径10 cmを超える木材は使用されていないと考えられる．ローム質土帯は木炭と同様の範囲で分布しており，標高が低い東側ほど幅広である．木炭が床面に枝材などの細い材，褐色土を挟み比較的大型の木炭という堆積になっており，典型的な土屋根の堆積である．そのため，少なくとも一部は土屋根であったと考えられる．一方で，一部で削平こそされていたものの，竪穴中心部には木炭の痕跡は検出されなかったことから土屋根が頂部までおよんでいないことは明らかである．

以上をまとめると，FHは地形に沿った傾斜した床を持ち，一部は地面を掘り込んでいる．構造材は細く，垂木上に枝を載せた後に一部に土をかけた土屋根である．構造は全弱であり，竪穴住居後の構造が不明ではあるが，耐久性においては竪穴住居を上回る可能性は低いため，規模の割に華奢な構造といえる．

4．標茶町茅沼遺跡

第2地点で，矢臼別層に比定されている灰白色火山灰（第IV層）と，摩周f火山灰（VI層）に挟まれた黒褐色土層（V層）中で「盛土の集中範囲」が報告されており，その中で木炭や焼土が検出されている（豊原1978）．この盛土状遺構が興味深い点

は，道東地域では大規模であり，焼土の分布（豊原1978, 36）や明瞭な遺物の集中（豊原1978, 35, 46）が見られることである．また，周囲には同時期と思われる竪穴住居跡が点在するにもかかわらず，盛土状遺構内では柱穴群が報告されているのみである．

村本（2009）で平地住居跡の可能性があると指摘したのはJ-19周辺の木炭群（豊原1978, 35）である．少量であるためか，配置はやや不規則に見えるが，数本単位で交差している状態である．比較的大型の木炭であるため自然炭化によるものとは考え難い．また，木炭より上面の土層図は掲載されていないが，写真（豊原1976, 70, 81）で示されている調査方法では掘り込みを見逃した可能性が低いと考えられる．そのため，火災にあった平地住居跡である可能性は高いと考えられる．いずれの周辺にも規則的な配列の柱穴群や炉跡と推定しうる焼土は報告されていない．

5．釧路市天寧1遺跡

F-11焼土跡は焼土，木炭が集中しており，規模が大きい．長軸7 m，短軸6 m程度の範囲に木炭および焼土が報告されている．木炭はほぼ同一方向を向く，いくつものまとまりが見いだせるが，それに直行するまとまりはほとんど見いだせない（工藤ら2008, 92）．また，同一方向を向くまとまりも全体としての規則性は見いだすことができない．報告書中では直下から検出されたH-1竪穴住居跡（工藤ら2008, 70）には伴わない木炭や焼土群であるとされているが，その関係はなお検討を要すると思われ，これを平地住居跡と即断することはできない．現地を実見していないため，本稿ではその判断を保留したい．ただし，竪穴住居跡の火災事例においても，必ずしも木炭の配置に規則性が見いだされるとは限らず，この規模の木炭集中が建物跡以外に由来する可能性も高くないことから，平地住居跡の可能性がある資料として紹介した．同遺跡内で検出されたF-50，F-61焼土跡も規模が大きいと共に，大型の木炭を伴い（工藤ら2008, 50, 99），同様に平地住居跡の可能性がある．

6．標津町伊茶仁チシネ第3竪穴群

B6, B7, B11グリッドより焼土，木炭の出土が報告されており，それぞれが一連のものと仮定すればB6およびB11グリッド出土のものは規模が大きい（椙田1990）．いずれも包含層上面が後世の撹乱を受けているため，掘り込みの有無については確認できないが，周辺の竪穴住居跡と比較して著しく浅いことは確かである．

B6グリッドの焼土，木炭は6 m角程度の範囲に分布しており，南側は木炭主体，北側は焼土と木炭が混在している（椙田1990, 48）．分布範囲のほぼ中央では地床炉が報告されている．報文中では木炭の配置に規則性がないとされているが，わずかながら北東–南西及び，それに直行する様子がうかがわれる．また，焼土下からも木炭が出土したとの記載がある．

B11グリッドの焼土，木炭は2 × 3 m程度の範囲に分布しているが，B6と比べて規模も小さく，木炭の配置に規則性は見られない（椙田1990，49）．分布範囲内には石囲炉と思われる屋外炉が報告されている．

両遺構とも直径3–5 cmの丸棒状の木炭を主体として，一部に板状のものが見られるとの共通の記載があり，興味深い．板状の木炭が本来板形の木材であるのか，太い棒状の木材が表面のみ炭化したことで板状になって検出されたのかは検討の余地があるが，比較的細い材が主体であるという点で来運1遺跡の事例と共通性が見られる．

7．根室市穂香川右岸遺跡

「盛土遺構」として報告されているJM-1–4（越田ら2005）の内，JM-1とJM-2は平地住居跡の可能性が高いと考えられる（越田ら2005, 66, 74）．共に長軸約4 mの楕円ないしは隅丸長方形で，JM-1は1巡，JM-2は2巡する柱穴状の小穴群と炉跡と思われる焼土が報告されている．JM-1は木炭を伴わないが，JM-2は格子状にも見えるやや規則的な木炭の分布が見られる．JM-2の焼土ないしベンガラの分布は後述する穂香竪穴群JM-5に類似する．また，両者ともに地形に沿った床面の傾斜が見られる．

8．根室市穂香竪穴群

「盛土遺構」として報告されているJM-1–10（越田ら2003）の内，木炭を伴うJM-5, 6は平地住居跡の可能性が高く，木炭を伴わないがJM-1もそれに準じると思われる．他のものも平地住居跡である可能性はあるが，根拠となる事象に乏しい．

JM-1は木炭を伴わないが，柱穴状の小穴群と焼土を伴う（越田ら2003, 161）．小穴群の配列は2重の環状や弧状のものを見出すことが可能である．規模や小穴状の掘り込みの分布から複数の遺構が重複している可能性もあると考えられる．焼土は環状に分布する小穴群とほぼ同様に環状に分布している．

JM-5は2地点に分かれ，更に東側のものは2箇所の木炭集中が見られる（越田ら2003, 186–188）．そのため，3基程度の平地住居跡を含むとも解釈できる．東側，西側のそれぞれ1箇所の木炭の集中には焼土，ベンガラの分布が見られる．焼土は木炭の分布に類似し，方形ないしは鈎型にベンガラは2箇所そのほぼ中央に並んでいる．柱穴状の小穴は検出されていない．

JM-6は，擦文文化期の竪穴住居に切られており，木炭の分布の大部分は削平された可能性がある（越田ら2003, 193）．木炭はほぼ同一方向を向いていると考えられる．

9．鶴居村下幌呂1遺跡

平地住居跡として4基（H-14–16, 26）が報告されている（北海道埋蔵文化財センター 2010, 2011）．平面図が公表されているH-14は楕円ないしは隅丸長方形で，木炭もほぼ全周で検出されている（北海道埋蔵文化財センター 2010, 49）．垂木と推定される木炭は20–30 cm間隔，それに直行する材は50 cmほどの間隔で組まれている．写真からは木炭の分布と屋根土及び周堤帯と推定される黄色土の分布はほぼ一致するようである．長軸上中央やや南寄りで炉が検出されている．

平地住居の構造

木炭の遺存状況が良好なオクシベツ6遺跡PIT 20や朱円48遺跡PIT 7，来運1遺跡FH，下幌呂1遺跡H-14，穂香川右岸JM-2では，放射状に延びる垂木と推定されるものと，それに直行する木舞と推定されるものが検出されている．垂木と推定される材は間隔が密であり，来運1遺跡FHや下幌呂遺跡H-14では約20 cm間隔である．一方で，それに直行する材は50 cm程とやや間隔が空く．下幌呂1遺跡H-14および，来運1遺跡FHは隅丸長方形ないしは楕円形であり棟木を持つ構造であると考えられるが，棟木と思われる木炭は出土していない．村本（2007, 2008）が北海道における火災住居跡を集成した際にも棟木と推定される木炭が出土した事例は極少数であり，棟木を持たない構造なのか，材として単に残り難いのかは今後の検討が必要である．

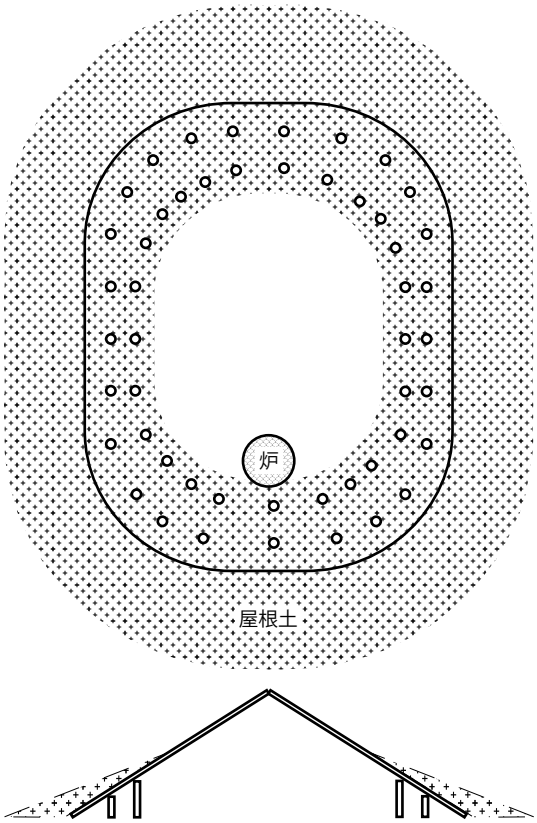
出土した木炭は垂木と推定されるものも含めて直径10 cmを超えるものは少数であり，全般に細い傾向がある．竪穴住居跡でも釧路市貝塚町1丁目遺跡では細い材のみが出土している．北筒諸型式の火災住居跡は調査事例が少ないため，単純に竪穴住居に比べて細い材を使用していたとは断定し難いが，来運1遺跡FHのように同時期の竪穴住居跡に比べて大型の事例でも特に太い材を多用しているという事例はない．前述の垂木の間隔が密であることは強度を考える上で自然であり，全体としては竪穴住居と比較し，相対的に華奢な構造であることを補うためであると考えられる．

木炭の周辺から検出されるローム質帯は，木炭の上下に検出される事例が多く，実見した中では来運1遺跡FHやオクシベツ6遺跡PIT 20，PIT 27，下幌呂1遺跡H-14等は土屋根と推定される出土状況を示していた．しかし，それらの褐色土帯と木炭の関係を観察する限り，屋根の裾側1/4–1/3にあたる1–2 m程度を覆っているに過ぎない．火災にあった竪穴住居跡で見られるように頂部付近には遺物包含層と同様の黒色土が用いられた可能性はあるものの，木炭の出土状況を考慮すると，その可能性は低い．屋根土の厚さは，周堤と一体となった部分は厚いが，頂部方向に向かって薄くなるか，のせられていないと考えられる．概ね10–20 cm厚程度と考えられる．宮本の住居形式における二段伏屋式に相当する構造である．また，来運1

遺跡FHやオクシベツ6遺跡PIT 20では屋根土層下から密集した炭化枝材が出土している．炭化枝材の出土は縄紋時代の火災住居跡で比較的多く見られ，屋根土の下に葺かれたものであると考えられる．

屋根が土屋根であることから，屋根勾配はそれほど急ではないと考えられ，45°程度と想定した場合で，比較的自由に歩き回るために1.5 m程の高さが必要と考えれば，周囲2 m程がその条件を満たさない．来運1遺跡FHのように直径が12–13 mであっても，有効に利用できる空間は直径8 m程度である．オクシベツ6遺跡PIT 20等の事例では他の竪穴住居と同等程度の範囲が有効に利用できる空間となるだろう．そのため，竪穴住居と比べて特に有効に利用できる空間が広いとは評価できない．

柱穴は明瞭な配置を持たない事例が主体であるが，来運1遺跡FH，穂香竪穴群JM-1，穂香川右岸遺跡JM-1では，複数列の環状に巡る小穴群が検出されている．特に，穂香竪穴群や穂香川右岸遺跡の事例では配列が密である．いずれも周縁部に巡っており，前述の屋根土や木炭の出土範囲に相当する．垂木によって構造を維持しているものの，屋根土がのる部分については細い柱で補強したものと推定される．



図． 縄紋時代中期末葉–後期前葉における平地住居上屋構造の模式図．

炉は検出されていない事例もあるが，検出されたものは地床炉で，長軸上にあり，中央からどちらかに寄る傾向がある．

平面形は，オクシベツ6遺跡や朱円48遺跡の事例は完掘していないため，円形である可能性も残るが，穂香竪穴群，穂香川右岸遺跡，下幌呂遺跡などの事例はいずれも隅丸長方形ないしは楕円形を主体とし，定型的である．また，床面は全体が地形に沿ってやや傾斜するものはあるものの，平坦である．一方で，同時期にあたるトコロ6類–北筒III式期の竪穴住居跡は不整多角形を主体とし，床面も屋内中央に大型で不定形の掘り込みの土坑状の施設を持つなど平坦とは言い難い事例が多く見られる．竪穴住居の平面形が不定形であることが必ずしも上屋が不定形であることを示していない可能性はあるが，少なくとも平地住居は竪穴住居に比べて定型的で，平坦で整った床面を持つといえる．

以上の所見をまとめ，縄紋時代中期末葉–後期前葉における平地住居の上屋構造を模式図にすると，図のようになる．

縄紋時代後期の平地住居跡との相違

縄紋時代後期の平地住居跡は道央および道南地域で報告されている．例えば，恵庭市ユカンボシE8遺跡，函館市（旧南茅部町）磨光B遺跡である．

ユカンボシE8遺跡焼土遺構は堂林式期の遺構と推定され，放射状に分布する木炭とそれを覆うヨシ状の炭化物が検出されている．直径5 m弱の円形で周堤帯や柱穴は報告されていない（上屋1989, 83）．

磨光B遺跡ではSB-1–10の柱穴群が検出されている．いずれも直径4–5 m程の範囲に1周ないしは2周の柱穴列が巡っている．SB-1は中央に土坑

があり，アスファルトが出土していることからアスファルト工房址とされている．柱穴群の中央に土坑を持つものは3基あり（SB-2, 3, 9），SB-2はSB-1と類似の遺構とされている（阿部・小林1995, 32–33）．報告されている遺物はホッケマ式期が主体であり，当該期の遺構と考えられる．

縄紋時代後期後葉では竪穴住居の形態が定型化しており，ややつぶれた円形の平面形，ほぼ全周に巡る小穴，台形に配置された主柱穴といった特徴は北東北から北海道にかけて広く見られる．磨光B遺跡の事例は柱穴が環状に巡るという点は竪穴住居の壁際の小穴と共通であるが，その形態は竪穴住居とは明らかに異なる．しかし，磨光B遺跡が環状列石を持つ集落跡であり，その環状列石と平地住居跡が近接していることを考えれば，同時期の北東北における環状列石に伴う平地住居跡との類似を考慮すべきであろう．

先に述べた縄紋時代中期末–後期前葉の平地住居跡は，柱穴配置と平面形が異なる．前述のようにオクシベツ6遺跡や朱円48遺跡の事例は完掘していないため，円形である可能性が残るが，穂香竪穴群，穂香川右岸遺跡，下幌呂遺跡などの事例はいずれも隅丸長方形ないしは楕円形であり，縄紋時代後期後葉の事例は円形を主体とする．また，柱穴の形態も異なる．更に，時期も^{14}C年代で約300 ^{14}C yrsの差があり，地域も異にする．両者の中間の時期に位置する事例については筆者の知る限り報告されていないため，現時点では出自を異にする遺構と考えられる．

おわりに

本稿では，道東地域における縄紋時代中期末–後期前葉の平地住居の上屋構造と，縄紋時代後期中葉以降の平地住居跡との関係について検討した．

平地住居は楕円形ないし隅丸長方形を主体とした定型的な形態で，屋根の裾中心に屋根土がのせられた土屋根住居である．柱穴状の小穴は縁辺近く，平面形と一致するように環状に巡る．全般に竪穴住居の竪穴部に比べれば定型的かつ，整った形態を示す．集落内における竪穴住居との立地の差異についてはすでに指摘しているが，この立地と構造の差異が用途の差異を示すものであるかについては，今後の課題としたい．

縄紋時代後期中葉以降の平地住居とは形態が異なる上に，時間的，空間的な断絶があるため，現時点では出自の異なり，北東北地域における環状列石に伴う平地住居との類似性が指摘できる．この類似性についても今後の課題としたい．

謝辞

本稿は，日本考古学協会2008年度発表および，北海道考古学会月例会をもとに書き下ろした．それらの発表および本稿の執筆にあたり以下の方々のご指導，ご助言を頂いた．末筆ながらお名前を記して感謝申し上げたい（五十音順，敬称略）．

阿部明義・大泰司統・岡村道雄・及川良彦・小林謙一・高田和徳・田代雄介・土肥孝・西本豊弘・松田功・武藤康弘・山岡景行・広田良成．

引用文献

阿部千春・小林貢．1996．磨光B遺跡．2 pls. + iv + 97 pp．南茅部町教育委員会，函館．

江坂輝弥．2005．平地住居跡．江坂輝弥・芹沢長介・坂詰秀一（編），新日本考古学小辞典．pp. 367–368．ニュー・サイエンス社，東京．

上屋真一．1989．ユカンボシE8遺跡．xii + 277 pp．恵庭市教育委員会，恵庭．

工藤研治・高橋和樹・影浦覚・越田雅司・福井淳一．2008．天寧1遺跡．10 pls. + xii + 355 pp. + 106 pls．北海道埋蔵文化財センター，札幌．

越田雅司・愛場和人・広田良成．2003．穂香竪穴群2．xiv + 8 pls. + 269 pp. + 122 pls．北海道埋蔵文化財センター，札幌．

越田雅司・愛場和人．2004．穂香竪穴群3．4 pls. + viii + 134 pp + 52 pls．北海道埋蔵文化財センター，札幌．

越田雅司・愛場和人．2005．穂香川右岸遺跡．8 pls + ix + 144 pp + 54 pls．北海道埋蔵文化財センター，札幌．

椙田光明．1990．伊茶仁チシネ第3竪穴群遺跡．viii + 97 pp + 43 pls．標津町教育委員会，標津．

豊原熙司．1978．茅沼遺跡群．vi + 191 pp．標茶町教育委員会，標茶．
松田功．2006．来運1遺跡：発掘調査報告書．斜里町文化財調査報告28．pl. + iv + 38 pp +12 pls．斜里町教育委員会，斜里．
松田功．2008．朱円26遺跡 オクシベツ6遺跡 オクシベツ24遺跡：発掘調査概要報告書．30 pp．斜里町教育委員会，斜里．
松田功・荻野幸男・大橋毅．1997．ピラガ丘遺跡：秋山第2地点；発掘調査報告書．斜里町文化財調査報告9．72 pp. + 17 pls．斜里町教育委員会，斜里．
松田功・村本周三．2010．朱円48遺跡 ウナベツ8遺跡：発掘調査概要報告書．24 pp．斜里町教育委員会，斜里．
松田功・村本周三・田代雄介．2012．朱円42遺跡 オクシベツ6遺跡　ポンシュマトカリペツ16遺跡：発掘調査概要報告書．30 pp．斜里町教育委員会，斜里．
宮本長二郎．1996．竪穴住居の復元．白石太一郎（編），家族と住まい．考古学による日本の歴史15．pp. 123–132．雄山閣，東京．
村本周三．2007．北海道先史時代の火災住居跡集成．セツルメント研究6: 61–88．
村本周三．2008．北海道の焼失竪穴建物．岡村道雄（編），日本各地各時代の焼失竪穴建物跡．pp. 6–8．奈良文化財研究所，奈良．
村本周三．2009．北海道における縄紋時代中・後期の「平地住居跡」とその暦年代．考古学研究56(2): 44–61．
村本周三・小林謙一・坂本稔・松崎浩之．2007．AMS-^{14}C年代測定を用いた遺跡形成過程推定への取り組み．国立歴史民俗博物館研究報告137: 365–387．
北海道埋蔵文化財センター（編）．2010．鶴居村下幌呂1遺跡．調査年報22: 46–51．

村本周三：道東地域における縄紋時代中–後期の平地住居跡

道東地域における縄紋時代中期末–後期前葉の平地住居の上屋構造を明らかにすると共に，後期中葉以降に道南地域で見られる平地住居との関係を検討した．同時期の竪穴住居跡は不定型なものを主体とするが，縄紋時代中期末–後期前葉の平地住居は楕円形ないし隅丸長方形を主体とし，炉や柱穴配置も定型的であることを明らかにした．また，後期中葉以降の平地住居とは形態が異なる上に，時間的，空間的な断絶があるため，出自の異なる可能性が高い．むしろ，形態や立地は北東北地域における環状列石に伴う平地住居との類似性が指摘できる．